

複数の作型が存在するメロン施設におけるスワルスキーカブリダニ放飼によるミナミキイロアザミウマの防除

増井伸一

メロンの定植を4週間間隔でずらしながら4作を栽培するビニールハウスの定植時にジノテフラン粒剤またはベンフラカルブ粒剤を施用する条件で、定植直後およびその4週間後の放飼スケジュールでスワルスキーカブリダニによるミナミキイロアザミウマの密度抑制効果をククメリスカブリダニ放飼とともに検討した。その結果、スワルスキーカブリダニの定着はククメリスカブリダニよりも良く、ベンフラカルブ粒剤を施用した区よりもジノテフラン粒剤を施用した区で定着が良い傾向が見られた。ミナミキイロアザミウマの成虫密度は両種のカブリダニ放飼によって低下しなかった。一方、幼虫密度はスワルスキーカブリダニ放飼によって低く維持された。以上の結果から、周年栽培されるメロンにおいてスワルスキーカブリダニ放飼によりミナミキイロアザミウマ幼虫の密度を抑制できる可能性が示唆された。

増井伸一・芳賀 一：複数の作型が存在するメロン施設におけるスワルスキーカブリダニ放飼によるミナミキイロアザミウマの防除。関東東山病虫研報 57: 79-81. (2010)

Masui, S. and H. Haga: Control of insect pests by the application of Dinotefuran granule at the time of planting of melon seedlings. Ann. Rept. Kanto Pl. Prot. Soc. 57: 79-81. (2010)

メロン定植時の粒剤施用が放飼された天敵の定着・生存に及ぼす影響

増井伸一

メロン定植時の粒剤処理がミナミキイロアザミウマ防除を目的に放飼される天敵の定着・生存に及ぼす影響を検討した。ジノテフラン粒剤とニテンピラム粒剤は定植時に放飼したスワルスキーカブリダニの定着に影響しなかった。しかし、ジノテフラン粒剤を処理した株から定期的に採取した葉を用いてアリガタシマアザミウマを飼育すると、その生存には42日後でも悪影響があった。各種粒剤を処理した株から28日後に採取した葉を用いてアリガタシマアザミウマを飼育し、生存に及ぼす影響を検討した結果、ジノテフラン、クロチアニジンには悪影響が残っていたのに対し、ベンフラカルブは影響がなかった。タイリクヒメハナカメムシに対して同様の検討を行った結果、処理28日後では上記3種の粒剤の影響は見られなかった。

増井伸一・芳賀 一：メロン定植時の粒剤施用が放飼された天敵の定着・生存に及ぼす影響。関東東山病虫研報 57: 111-113. (2010)

Masui, S. and H. Haga: Influence of the application of granular insecticides at the time of planting of melon seedlings on the survival of three predatory enemies, *Amblyseius swirskii*, *Franklinothrips vespiformis* and *Orius strigicollis*. Ann. Rept. Kanto Pl. Prot. Soc. 57: 111-113. (2010)

メロン定植時のジノテフラン粒剤施用による各種害虫に対する防除効果

増井伸一

メロンの定植を4週間間隔でずらしながら周年栽培するビニールハウスで各定植時の粒剤処理によるタバココナジラミ、トマトハモグリバエおよびワタアブラムシに対する防除効果を検討した。その結果、ベンフラカルブ（5%）粒剤の株当たり1g処理は2作目以降に成幼虫密度が上昇したが、ジノテフラン（1%）粒剤の株当たり2g処理は長期間にわたり、これらの害虫密度を低く維持するのに有効であった。

増井伸一・芳賀 一：メロン定植時のジノテフラン粒剤施用による各種害虫に対する防除効果。関東東山病虫研報 57：115-118. (2010)

Masui, S. and H. Haga: Control of *Thrips palmi* Karny by releasing of *Amblyseius swirskii* Athias-Henriot on plural cropping types of melon in a greenhouse. Ann. Rept. Kanto Pl. Prot. Soc. 57: 115-118. (2010)

キアシクロヒメテントウ *Stethorus japonicus* 幼虫に対する 各種殺虫剤の影響

増井伸一

ハダニの有力な捕食性天敵であるキアシクロヒメテントウの2～3齢幼虫に及ぼす19種の殺虫剤の影響を直接散布によって評価した。その結果、クロルフェナピルとエチプロールは影響がなく、2種のネオニコチノイド系殺虫剤（ニテンピラム、ジノテフラン）は影響が比較的小さかったことから、これらの殺虫剤の使用はカンキツのIPMの観点で推奨されるべきであると考えられた。一方、合成ピレスロイド剤、有機リン剤、カーバメート系剤、トルフェンピラドは影響が強く、ネオニコチノイド系剤の中には影響が強いものが存在した。

増井伸一：キアシクロヒメテントウ *Stethorus japonicus* 幼虫に対する各種殺虫剤の影響。関東東山病虫研報 57：129-130. (2010)

Masui, S.: Effects of insecticides on the larvae of the acarophagous ladybird beetle *Stethorus japonicus* H. Kamiya (Coleoptera: Coccinellidae). Ann. Rept. Kanto Pl. Prot. Soc. 57: 129-130. (2010)

チャノキイロアザミウマによるカンキツ果実の被害発生量に 及ぼす周辺植生の影響

増井伸一

チャノキイロアザミウマによるカンキツ果実の被害発生量と周辺植生の関係を検討した。その結果、チャ園に隣接する園で被害が高く、発生源としてチャ園が重要であることが再確認された。チャが経済されていない沼津市西浦地区と浜松市三ヶ日地区でイヌマキ樹が防風垣として植えられているカンキツ園を比較すると三ヶ日地区で被害が多く、主要な発生源であるイヌマキ樹での発生量が両地区で異なることが示唆された。

増井伸一：チャノキイロアザミウマによるカンキツ果実の被害発生量に及ぼす周辺植生の影響。関西病虫研報 52 : 99-100. (2010)

Masui, S. and M. Ikeda: Effects of vegetation around citrus orchards on the amount of citrus fruits damaged by yellow tea thrips *Scirtothrips dorsalis* Hood. Ann. Rept. Kansai Pl. Prot. 52 : 99-100 (2010)

カンキツ園の防風垣イヌマキ樹におけるカブリダニ類と チャノキイロアザミウマ発生量の地域差

増井伸一

2007年に沼津市西浦地区と浜松市三ヶ日地区のカンキツ園で防風垣として植えられているイヌマキ樹に発生するチャノキイロアザミウマとカブリダニ類の密度を調査した。西浦地区のイヌマキ樹ではニセラーゴカブリダニ、コウズケカブリダニ、ミヤコカブリダニなどのカブリダニ類が調査を実施した5月上旬から7月下旬まで認められた。一方、三ヶ日地区のイヌマキ樹では5月にカブリダニは認められず、6月上旬から7月上旬にかけて徐々に増加した。5月から7月に西浦地区のイヌマキ樹で計数されたカブリダニ類は三ヶ日地区と比べ有意に多かった。その結果、6月上旬から7月下旬に西浦地区のイヌマキ樹で発生するチャノキイロアザミウマの成幼虫数は三ヶ日地区と比べ少なかった。これらの結果から、西浦地区ではイヌマキの樹上でカブリダニ類がチャノキイロアザミウマの密度を抑制していることが示唆された。

増井伸一：カンキツ園の防風垣イヌマキ樹におけるカブリダニ類とチャノキイロアザミウマ発生量の地域差。関西病虫研報 52 : 11-14. (2010)

Masui, S. : Regional differences in the density of phytoseiid mites and yellow tea thrips *Scirtothrips dorsalis* Hood on the windbreaks of bigleaf podocarp trees surrounding citrus orchard. Ann. Rept. Kansai Pl. Prot. 52 : 11-14 (2010)

寄主植物への刈り込みがチャノキイロアザミウマ成虫の移動分散に及ぼす影響

増井伸一

寄主植物であるチャ樹やイヌマキ樹への刈り込みや摘採がチャノキイロアザミウマの移動分散に及ぼす影響をカンキツ園とこれに隣接したチャ園、防風垣のイヌマキ樹で調査した。これら3つの圃場に設置したトラップへの成虫捕獲ピーク日は相互に一致するとともに、有効積算温度によって予測されたカンキツ園への飛来ピーク日と一致した。3種の圃場ともチャ樹やイヌマキ樹に刈り込みが行わなければ、トラップへの捕獲数はピークから10日以内にピーク5日目のレベルまで減少した。一方、捕獲ピーク日から1～9日後の期間にチャ樹に刈り込みが行われると10日後でも捕獲数は減少しなかった。以上の結果から、成虫の飛翔活性は羽化直後に最も高くなり、寄主植物への刈り込みにより有用なエサが減少すると飛翔が活発になると考えられた。

増井伸一 寄主植物への刈り込みがチャノキイロアザミウマ成虫の移動分散に及ぼす影響. 応動昆 54 : 135-139. (2010)

Masui, S.: Effect of Trimming and Harvesting of Host Tea Plants and Bigleaf Podocarp Trees on the Dispersal of Adult Yellow Tea Thrips *Scirtothrips dorsalis* Hood (Thysanoptera: Thripidae) in Citrus Orchards. Jpn. J. Appl. Entomol. Zool. 54 : 135-139 (2010)

スクミリンゴガイの水田間の移動と分布

小澤朗人

スクミリンゴガイの水田間の移動と分布の実態について、焼津市の田越し灌漑水田において標識再捕法を用いて調査した。放逐2週間後の標識貝の再捕率は約60%であり、放逐された貝の30%～60%が放逐された筆以外に水口を通過して移動していた。標識貝の移動距離は最大68mであり、ほとんどが30m以上移動していた。これらの結果から、本貝は、一旦水田に侵入すると、水口を通じて短期間で広範囲に分散することが示唆された。

小澤朗人・牧野秋雄：スクミリンゴガイの水田間の移動と分布。関東病虫研報 57: 61～62(2010)

Ozawa, A. and T. Makino: Dispersal and distribution of the apple snail, *Pomacea canaliculata* (Lamarck) (Architaenioglossa: Pilidae), in paddy fields. Ann. Rept. Kanto Pl. Prot. Soc. 57: 61～62 (2010)

クワシロカイガラムシを対象に散布されたピリフルキナゾン水和剤の新芽吸汁性害虫に対する防除効果

小澤朗人

新薬剤ピリフルキナゾンを5月下旬にクワシロカイガラムシ対象に散布した場合の、二番茶芽におけるチャノミドリヒメヨコバイとチャノキイロアザミウマに対する副次的な効果を評価した。その結果、ヨコバイに対する密度抑制効果は3週間以上確認され、二番茶芽における被害防止率は90%以上に達した。一方、アザミウマでは、密度抑制効果はほとんど認められず、被害防止効果もなかった。このことから、本剤によるクワシロカイガラムシ防除によって、チャノミドリヒメヨコバイに対する防除効果も同時に期待できる。

小澤朗人：クワシロカイガラムシを対象に散布されたピリフルキナゾン水和剤の新芽吸汁性害虫に対する防除効果。関西病虫研報 53: 103~104(2011)

Ozawa, A.: Secondary control effects of a new insecticide, pyrifluquinazon, applied on the mulberry scale, *Pseudaulacaspis pentagona* (Targioni), against the pests infesting new shoots of tea plant. Ann. Rept. Kansai Pl. Prot. 53: 103~104 (2011)

チャノホソガ蛹から羽化した寄生蜂の種構成

小澤朗人

チャノホソガ蛹における天敵類の寄生状況を調べた。蛹から羽化した天敵類全体の寄生率は約50%で、それらの中では寄生蜂がほとんどを占めたが、タマバエの1種 *Lestodiplosis* sp.も認められた。寄生蜂類では、ヒメコバチ科の *Elasmus* sp.単独が全体の29.3%と最も多く、次いで同科 *Tetrastichus* sp.単独が10.6%であった。また、*Elasmus* sp. と *Tetrastichus* sp.両種が羽化した寄主が8.1%あった。ヒメコバチ科以外ではヒメバチ科の *Temelucha* sp.が2.4%であった。*Elasmus* sp. と *Tetrastichus* sp.は多寄生性で、性比は雌に偏っていた。

小澤朗人：チャノホソガ蛹から羽化した寄生蜂の種構成。関西病虫研報 53: 105~106(2011)

Ozawa, A.: Species composition of parasitic wasps emerged from the pupae of the tea leafroller, *Caloptilla theivora* (Walsingham) (Lepidoptera: Gracillariidae). Ann. Rept. Kansai Pl. Prot. 53: 105~106 (2011)

チャ寄生クワシロカイガラムシの薬剤感受性

小澤朗人

近年、静岡県ではクワシロカイガラムシが難防除害虫として問題化しており、問題化の背景として薬剤感受性の低下が疑われた。そこで、県内個体群と宮崎県の個体群を供試して既存のブプロフェジン剤、DMTP剤に対する感受性を調べた。宮崎個体群では両薬剤ともに感受性は高かったが、静岡個体群ではブプロフェジンに対する感受性が大きく低下していた。また、DMTPに対する感受性の低下も認められ、宮崎個体群を1とした抵抗性比は3.0~28.9倍であった。なお、クワシロカイガラムシの薬剤感受性低下は、世界初の事例である。

小澤朗人：チャ寄生クワシロカイガラムシの薬剤感受性。応動昆 54: 205~207(2010)

Ozawa, A.: Insecticide susceptibility of the white peach scale, *Pseudaulacaspis pentagona* (Targioni) (Homoptera: Diaspididae), infesting tea trees. Jpn. J. Appl. Entomol. Zool. 54:205~207 (2010)

播種時期および摘心節位がキンギョソウの 生育・開花に及ぼす影響

稲葉善太郎

日本の暖地においてキンギョソウ‘メリーランドピンク’、‘ライトピンクバタフライII’および‘ポトマックアーリーホワイト’を供試し、7月16日、7月31日および8月14日に播種して第2または3節で摘心し、冬期夜温11℃設定で栽培した。‘メリーランドピンク’では、7月31日および8月14日播種の第3節摘心により、採花本数の増加と開花初期の切り花長が長くなることが認められた。‘ライトピンクバタフライII’では、いずれの播種時期においても第2節摘心で開花初期の切り花長が長かった。‘ポトマックアーリーホワイト’では、7月16日播種の第2または3節摘心および7月31日の第3節摘心により冬季の採花本数が増加した。

稲葉善太郎・馬場富二夫・石井ちか子・石井香奈子・武藤浩志・末松信彦・堀内正美：播種時期および摘心節位がキンギョソウの生育・開花に及ぼす影響。園芸学研究 10: 537-544. (2011)

Inaba, Z., F. Baba, C. Ishii, K. Ishii, H. Muto, N. Suematsu and M. Horiuchi: Effects of Sowing Time and Pinching Node Positions on the Growth and Flowering of Snapdragons (*Antirrhinum majus* L.). Hort. Res.(Japan) 10: 537-544. (2011)

小型ストローク式ハーベスタの造材作業における労働生産性

渡井純・望月靖郎

小型高性能林業機械は、機体が小さく重量も軽いことから、急傾斜地や軟弱地盤等の条件下における機械作業への期待が高まっている。しかし、これら小型高性能林業機械の作業能力や作業システムに関してはあまり把握されていない。今回、小型ストローク式ハーベスタの造材作業の功程調査を行い、労働生産性について評価した。

調査の結果、造材作業全体における労働生産性は、生産材積ベースで 28.27 m³/ (人・日) であった。また、伐倒木 1 本当たりの調査工程全体における平均処理時間は 3.29min で、その内、玉切り・枝払い作業では 1.57min であった。枝払い作業について、処理木はヒノキで枝の密集度も高く、最大枝径も 6.1 cm と太いものも含まれていたが、枝払い作業に伴うトラブルなどはなく、ストローク式ハーベスタの枝払い能力はかなり高いものと推察された。

渡井純：小型ストローク式ハーベスタの造材作業における労働生産性。中部森林研究，59：135～136（2011）

Watai, J. and Y. Mochizuki : A labor productivity of a bucking operation by a small size harvester of stroke type. Chubu Forest Research 59 : 135～136 (2011)

スギ・ヒノキ人工林の抜き伐り地における広葉樹の更新 —ニホンジカ等による採食の影響—

近藤 晃

スギ・ヒノキ人工林を抜き伐りして針広混交林化を図るに際し、ニホンジカ等が高密度で生息する地域における広葉樹の人工更新および天然更新に及ぼすシカ採食の影響について検討した。獣害防護柵で採食の影響を比較した結果、植栽した 4 種の広葉樹苗は柵内では健全に成長したが、柵外では全て採食され樹高成長が抑制されるなど健全な成長は見込めなかった。シカ採食に初期段階で樹種選択性が認められた。天然更新で侵入した広葉樹個体数には柵内外で差異はないが柵外ではシカ採食により樹高成長が抑制された。シカ採食圧を低減させない限り人工更新および天然更新で広葉樹が健全に生育する可能性は低いと推測された。防護柵設置により表面侵食を軽減する林床の植被率が増加した。

近藤 晃：スギ・ヒノキ人工林の抜き伐り地における広葉樹の更新—ニホンジカ等による採食の影響—。中部森林研究 59：5～8（2011）

Kondo, A. : The regeneration of broad-leaved trees after regeneration cutting in Sugi (*Cryptomeria japonica*) and Hinoki (*Chamaecyparis obtusa*) plantations— Effects of deer browsing— . Chubu For. Res. 59 : 5～8 (2011)

アーバスキュラー菌根菌によるケヤキ苗の成長促進効果

袴田哲司

アーバスキュラー菌根菌の定着がケヤキの成長に与える影響を明らかにするため、ケヤキ林土壌を接種源としてケヤキ実生苗にアーバスキュラー菌根菌の接種を試み、その後、異なる用土に移植し成長を調査した。ケヤキ林土壌の施用により85%以上の個体にアーバスキュラー菌根菌が定着したが、滅菌したケヤキ林土壌では35%以下にとどまった。可給態リン酸量の少ない用土ではケヤキ林土壌を接種源とした苗の苗高、根元径、葉数が滅菌土壌を接種源とした苗よりも有意に大きかったが、可給態リン酸量の多い用土で育苗した場合は、ケヤキ林土壌を接種源とした苗と滅菌土壌を接種源とした苗との間で有意差は認められなかった。

袴田哲司・山田晋也・山本茂弘：アーバスキュラー菌根菌によるケヤキ苗の成長促進効果。中部森林研究 59：233～234 (2011)

Hakamata, T., S. Yamada and S. Yamamoto: Effect of arbuscular mycorrhizal fungi on growth of *Zelkova serrata* seedlings. Chubu Forest Research 59 : 233～234 (2011)

静岡県のスギ人工林における雄花量の年次変動 及び雄花量と気象条件・花粉飛散量との関係

佐野信幸・近藤 晃

静岡県では、1994年から天竜地域のスギ人工林8林分で目視による雄花着生調査を始め、2003年からは県全域のスギ人工林91林分で同様の調査を行った。その結果、スギ雄花量は年次変動が大きく、前年夏の気象条件と相関が認められた。特に7月の気温及び日照時間と高い正の相関が、降水量とに負の相関が認められた。また、スギ人工林の雄花量と花粉飛散量とに高い相関が認められ、目視での雄花着生調査による花粉飛散量の予測が有効であることが確かめられた。

佐野信幸・近藤 晃：静岡県のスギ人工林における雄花量の年次変動及び雄花量と気象条件・花粉飛散量との関係。中部森林研究. 59:47～48(2011)

Sano, N. and A. Kondo: Annual changes of male flower production and its relationships with weather conditions and the amount of airborne pollen in *Cryptomeria Japonica* plantations in Shizuoka Prefecture. Chubu Forest Research 59:47～48(2011)

ジベレリン処理によるハリギリ種子の発芽促進及び苗木の成長促進

山本茂弘

木材だけでなく山菜としても有用なハリギリの効率的な苗木生産のため、ジベレリンによる種子の発芽促進効果及び苗木の成長促進効果を調べた。種子に対し、ジベレリンの濃度(0, 50, 500ppm)と浸漬時間(1分, 2時間, 17時間)を組合せて処理した。その結果、発芽率は0~27%となり、ジベレリン500ppmの17時間浸漬処理が最も高く、発芽促進方法として最も適すると思われた。当年生苗木に対し、100ppmの濃度のジベレリンを6月下旬に葉面散布処理したところ、成長休止後の苗高は、無処理区の33.3mmに対し、ジベレリン散布処理区では151.5mmと伸長促進効果が認められた。一方、根元径は無処理区で4.5mm、ジベレリン100ppm散布処理区では4.3mmで両者に明らかな差はなかった。

山本茂弘：ジベレリン処理によるハリギリの種子の発芽促進及び苗木の成長促進。中部森林研究 59：45-46(2011)

Yamamoto, S. : Promotion of seed germination and seedling growth by gibberelline treatment in *Kalopanax pictus*. Chubu Forest Research 59 : 45-46 (2011)

DNA マーカーによるコナジラミ類寄生蜂3種の識別法の開発

杉山恵太郎

コナジラミ類(オンシツコナジラミ、タバココナジラミ)の生物的防除に利用するため、生物農薬として利用されている3種のコナジラミ類寄生蜂、オンシツツヤコバチ、サバクツヤコバチ、チチュウカイツヤコバチの生物農薬として利用されている系統を容易に識別するためのマルチプレックスPCR法を開発し、1回のPCRで3種を容易に識別することが可能となった。

杉山恵太郎・日本典秀・大矢武志・二村友彬：DNAマーカーによるコナジラミ類寄生蜂3種の識別法の開発。日本応用動物昆虫学会誌 55：258~260(2011)

Sugiyama, S., N. Hinomoto, T. Ohya and T. Furamura : Species Discrimination of Three Commercially Available Whitefly Parasitoids, *Encarsia formosa* Gahan, *Eretmocerus eremicus* Rose and Zolnerowich and *Er mundus* (Mercet) (Hymenoptera: Aphelinidae), by DNA Markers. Jpn. J. Appl. Entomol. Zool. 55: 258-260 (2011)

3種の天敵ツヤコバチ類、チチュウカイツヤコバチ、 サバクツヤコバチ、オンシツツヤコバチに対する殺虫剤の影響

杉山恵太郎・片山晴喜

コナジラミ類の生物的防除のためにコナジラミ類の3種の天敵ツヤコバチ類、チチュウカイツヤコバチ、サバクツヤコバチ、オンシツツヤコバチに対する殺虫剤の影響を、成虫に対しては薄膜法、蛹に対しては浸漬法で評価した。その結果、すべての種類の成虫と蛹に対して、IGR剤（フルフェノクスロン、ルフェヌロン）、BT剤、ピメトロジン、イオウの死亡率は30%以下で、これらの薬剤は寄生蜂に対して影響はなかった。ネオニコチノイド剤（アセタミプリド、クロチアニジン、ジノテフラン、イミダクロプリド、ニテンピラム）、合成ピレスロイド剤（エトフェンプロックス、ペルメトリン）、有機リン剤（アセフェート、フェニトロチオン）、クロルフェナピル、エマメクチン安息香酸、スピノサド、トルフェンピラドは非常に影響があり（死亡率100%）、ダニ剤（チノメチオネート、ミルベメクチン、ピリダベン）は、成虫に対して中程度から非常に影響があった（92%以上の死亡率）。それぞれの殺虫剤に対する蛹の死亡率は、成虫に比べ概して低く、成虫と蛹の傾向はよく似ていた。これらの結果、IGR剤、BT剤、ピメトロジンとイオウの影響は低く、これらの剤は施設のコナジラミ類のIPMに寄生蜂とともに利用できる。

Sugiyama, K., H. Katayama and T. Saito : Effect of insecticides on the mortalities of three whitefly parasitoid species, *Eretmocerus mundus*, *Eretmocerus eremicus* and *Encarsia formosa* (Hymenoptera: Aphelinidae) . Appl Entomol Zool 46:311-317 (2011)

静岡県のコデマリに寄生するシナノコナジラミの発生消長

芳賀 一・万年潤哉

コデマリはバラ科シモツケ属の落葉低木で、静岡県西部地域の特産品であるが、産地ではシナノコナジラミが葉に多寄生し、すす病を誘発して問題となっている。本種の生態について不明な点が多く、発生消長も明らかでないため、2009年3月5日から2010年3月4日まで、現地ほ場2ほ場（A,Bほ場）で発生消長を調査した。成虫はA,B両ほ場でそれぞれ4回発生の山が認められ、幼虫はAほ場で3回、Bほ場で4回の発生の山が認められた。両ほ場とも、3~7月は成虫、幼虫の発生の山が交互に見られ、発生時期は2ほ場でほぼ一致した。このことから、発生予察により産地での防除適期が明らかになる可能性が示された。すす病は、発生量の多いBほ場でのみ認められ、100頭/枝以上の個体数が連続2週間以上あると、本病が発生すると考えられた。両ほ場とも薬剤防除は実施されていたが、散布後の発生数の減少は認められず、殺虫剤による防除効果はかなり低いと考えられた。関西病虫研報(53) : 147-148 (2011)

Haga, H. and J. Mannen : Seasonal prevalence of occurrence of the mulberry whitefly, *Bemisia shinanoensis* Kuwana, on reeves spiraea, *Spiraea cantoniensis* Lour, in Shizuoka Prefecture. Ann. Rept. Kansai Pl. Prot. (53) : 147-148 (2011)

静岡県の露地栽培ギクに発生しているアザミウマ類

土井誠・加藤光弘・斉藤千温

静岡県内の露地栽培ギクに発生しているアザミウマ類の種類について 2008 年及び 2009 年の 2 年間調査を行った。その結果、静岡県西部地域の露地ギクでは、本ぼ生育初期の 6 月から着蕾期の 9 月までは、クロゲハナアザミウマの比率が最も高く、発生ほ場も半数以上で本種が優占種となっていることが明らかとなった。また、着蕾～開花期にあたる 9、10 月にはミカンキイロアザミウマやハナアザミウマ等が増加し、発生種数も増加した。2 年間で発生が確認された種は、チャノキイロアザミウマ、コスモスアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、ビワハナアザミウマ、ハナアザミウマ、クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、キイロハナアザミウマ、ミナミキイロアザミウマの 10 種類（クダアザミウマ類を除く）であった。

土井 誠・加藤光弘・斉藤千温：静岡県の露地栽培ギクに発生しているアザミウマ類。関西病虫研報 53：131-132 (2011)

Doi, M., M. Kato and C. Saito : Thrips on open field chrysanthemum cultivation in Shizuoka prefecture. Ann. Rept. Kansai Pl. Prot. 53: 131-132 (2011)